

第14回

in 尼崎

日本子ども虐待医学会学術集会

Japanese Medical Society on Child Abuse and Neglect

子ども虐待医学における「支援」を考える



会期：2023.7.1(土)～7.2(日)
プレングレス 6.30(金)

会場：尼崎市総合文化センター
あましんアルカイックホール・オクト
〒660-0881 兵庫県尼崎市昭和通2-7-16



(学術集会ホームページ)

大会長：毎原 敏郎（兵庫県立尼崎総合医療センター）

主催：一般社団法人 日本子ども虐待医学会

事務局：兵庫県立尼崎総合医療センター 子ども家族支援室

後援：法務省、警察庁、子ども家庭庁、日本看護協会、日本小児看護学会、日本社会福祉士会、日本精神保健福祉士協会、日本医療ソーシャルワーカー協会、日本小児科学会、日本子ども虐待防止学会、神戸地方検察庁、兵庫県警察、兵庫県、尼崎市、兵庫県看護協会、兵庫県医師会、兵庫県小児科医会、尼崎市医師会、尼崎市小児科医会

運営事務局：株式会社プラスエス・アカデミー内 〒591-8025 大阪府堺市北区長曾根町3-201

E-mail: 14jamscan@plus-s-ac.com Tel: 072-275-5723 FAX: 072-275-5724

【開催趣旨】

日本子ども虐待防止学会から医学・医療分野が独立して、日本子ども虐待医学研究会が設立されてから2023年夏で14年になります。この間には日本子ども虐待医学会への移行や一般社団法人の設立、児童虐待防止法・児童福祉法の改正など、学会の内外において多くの変化がありました。学会としては医学・医療が特に重要な役割を担う身体的虐待、特に虐待による乳幼児頭部外傷や性虐待に重点を置いてきたことは、学術集会での演題からも見てとることができます。これは医学会として果たすべき責務を考えると必要かつ当然であったといえます。しかし一方では、その過程において医療者の間には虐待に関する意識や活動のレベルに大きな格差が生じてきているように感じられます。

国際子ども虐待防止学会の元会長 R.Krugman 氏が提唱した**子ども虐待対応の6段階**に小林美智子先生が加筆されたものをご紹介します（下表）。医学・医療の分野でもさまざまな段階の対応が混在しています。例えば「虐待＝残虐・残酷」というイメージが強いためか「そんな子どもは診たことがない」と言う医師も少なくありません。また虐待への関わりが通告や一時保護で終わっている医療機関も多いことでしょう。周産期からの虐待予防を目指す機関も増えてきていますが、虐待の発生予防に本格的に取り組むためには、医療者のマンパワーも利用できるノウハウも限られているのが現状です。

本学術集会では、虐待を受けた子どもだけでなく加害者を含む養育者に対して、医療者として関わる姿勢を考える機会にしたいと思います。**支援**をキーワードにして、さらには**養育者との協働**を目指すことで、虐待をマルチトリアートメントというよりも広く**養育の不調**と捉えて、**予防という観点**から関わる医療者が増えることを願っています。

基調講演 1：不適切養育環境で育つ子どものこころの理解

講師 星野 崇啓先生（さいたま子どもこころクリニック）

基調講演 2：虐待をしてしまう親のこころの理解

講師 亀岡 智美先生（兵庫県こころのケアセンター）

教育講演 1：切れ目のない支援の実現に向けて

～すべての子どもの権利保障～

講師 藤林 武史先生（西日本こども研修センターあかし）

教育講演 2：発達障害のある子の心の育ちと育みの支え

～トラウマとレジリエンスの視点から～

講師 岡田 俊先生（国立精神・神経医療研究センター）

【シンポジウム】

1. 急性期医療における支援

初期対応での子どもの代弁者としての役割や、親子への支援の方法を検討します。

2. DVへの対応に学ぶ

DV家庭にいる子どもへの関わりについて、研究者、弁護士、カウンセラーとともに対応を模索します。

3. 多機関からの支援

支援という観点から警察、検察、児童相談所、民間の関わりを知り、医療が連携する方法を考えます。

4. 動物からの支援

付添犬やセラピー犬（動物介在活動・介在療法）が、子どもの気持ちを和らげる過程をご紹介します。

子ども虐待対策はどの国も同じ経過をたどる

- I 虐待の存在を無視し続ける
- II 虐待の存在に気づく
- III 「かわいそうな子」を「ひどい親」から離す
- IV 親の治療に挑戦する
- V 性的虐待に気づく
- VI 予防に取り組む
- VII 心理的虐待・ネグレクトの再認識